
伝文

日本口承文芸学会 会報

第66号 2020年2月 発行

日本口承文芸学会

〒168-8508 東京都杉並区大宮 2-19-1

高千穂大学 立石展大研究室

Tel 03-3317-4077 (内線3421)

FAX 03-3313-9034

E-mail info@ko-sho.org

昔話の語りと研究の今後

佐々木 達司

昔話の調査を始めたのは22歳だったから65年になる。とは言ってもここ5年ほどは伝承の語り手に出会っていない。

きっかけは、関敬吾著『日本昔話集成』である。一冊の本が人生を変えるなんて大げさなと思っていたが、私は『集成』の虜となった。昔話が学問の対象になること、調査が急務であることを知って、私にもできるのではないかと考えたが、昔話の知識はなくまったくの手探りだった。そこで調査のかたわら民俗学の本を読み漁った。

「もう少し早ければ昔話のうまいお婆さんがいたのに」と言われながらも、今になってみるとそれなりの調査ができたように思う。言い換えれば、日本昔話の終焉に立ち会ったのである。その機会に恵まれた幸運と淋しさが交錯する。

最近新しい語り手が養成され、図書館や保育園などで活躍している。新しい語り手の皆さんは勉強熱心で語りもうまい。伝承の語り手がほとんどいなくなった後は、新しい語り手に委ねられることになる。

伝承の語りでは(複数の聞き手がいることもあるが)基本は一對一だった。姉たちと一緒に聞いても興味関心の違いから集中できなかった。祖母は私一人だけに、布団の中では「桃太郎」や「瓜姫」、外で山鳩が鳴いていると「山鳩不孝」、山道に蛇がいると「蛇婿入り」など、折りにふれて語った。「昔話は語り手が聞き手に語るたびごとに成立する一回性の文芸である」(稲田浩二)。

新しい語りは、複数の語り手から大勢の聞き手に向けて語られる。全体を集中させる技術も必要であり、語り手同士の評価も気になることであろう。新しいものを取り入れ、語り手同志が競いあうのも発展の過程だろうが、なかには過剰な演技など気になることもある。伝承の昔話は口承が主であったが書承も取り入れられており、また家庭での語りと集団の語りは別ものであるにしてもである。

語りの変容はやむをえないことであろうが、語りや口承文芸研究がどのようになっていくのか、私には見極める時間が残されていないが、大いに気になるところである。

(青森県)

シンポジウム:野村純一論—その研究手法と業績—

内藤 浩誉(神奈川県)



口承文芸研究を牽引し本学会の会長も務めた故野村純一氏の研究業績を改めて振り返り、今後の指標を見いだそうとする例会が、2019年10月20日に國學院大學で開催された。会場校は野村氏の母校かつ長年教員として指導・研究活動を行った拠点で、さらに当年は奇しくも13回忌に当たる。約30名の参加者の中には生前より親交のあった会員も多く、会場の一角で展示紹介されていた著作物を各自が手に取りながら思い出話を語り合う場面が見られるなど、懐かしさに包まれる中、盛會に終わった。

はじめに、大学の同僚で『野村純一著作集』(全9巻、清文堂)の責任編集を務めた小川直之氏が「口承文芸の文化学—野村純一の視座—」と題し、文化学として口承文芸はどのように位置づけられるのか、という観点において野村はより豊かな口承文芸学の展開の土台を作ったと評した。

その内容として、「語りの時空」「語りの形態」「昔話世界の芸能との関係性」「語りの系譜論」の4点を示しつつ、語りの作法にこだわりながら丹念な読み込みと心意の読み取りによって語りの時空論を事実として明らかにし、現場から理論化・集約、提示したと指摘する。続いて、齋藤純氏は「遠望する野村純一—物語と『もうひとつ』の発想—」と題し、同時期に同テーマの「桃太郎」伝説研究を行った経緯から、野村の研究の幅広さ、大衆性、中間を見る視点を挙げ、研究内容の理解における研究者論、社会での位置づけの必要性を指摘したと述べた。さらに、師弟関係の立場から、「野村純一と口承文芸研究」と題した常光徹氏は、世間話を捉える同時代への眼差しやフットワークの軽さ、意表を突く表現・発想について言及、類型に着目し関心ある類語収集に徹した姿勢を指摘した。後半の討論では、「語り掛けるような独特な文体を持ち」(齋藤氏)、「結論を述べることは少ない」(常光氏)と指摘された野村の論文について、話術の巧みさは若い頃に小説家を目指したことと関係あるだろうという見方が提示されたり、「口承文芸学」という分野開拓での戦略は柳田國男の状況と似ているという指摘が出されるなど、活発な質疑応答や意見が交わされた。

文学の民俗学的研究への理解を深め、学問土壌を豊かにしようとした野村氏の姿勢や言葉が甦るなか、口承文芸の本質および支える人々に向けた眼差しの深さを改めて噛みしめる機会となった。膨大で多岐に渡る研究業績や教育活動を俯瞰する形で会話は進行したが、加えるならば、「語り」の意義を易しく説きつつ市井の人々に自覚と活動を促した功績も忘れてはならないだろう。「生」の中で育まれた口承文芸が「生き生きと」継承されるための環境を考えると、客観的に捉え分析する学問が果たす役割は大きい。そのことを示した野村氏の想いを後学の者としてどのように展開すべきか、刺激ある会となった。



21世紀に入って、伝承の語りの姿が目に見えて消えていきました。

これは語り手がいなくなったからではなく、語り手の回りから聞き手が姿を消し、語りの場が喪失したからです。今では語り手は、聞き手を求めて学校や公民館、老人ホームや道の駅まで出かけて語ります。語りには伝承の語りもありますが、本から学んだ話もあります。そして語り手は、多くの場合初対面の聞き手に語るようになりますから、語りの世界を生み出すために特別な工夫が必要になります。その意味で、彼らはみな新しい語り手なのです。こうした新しい語りの姿を紹介するために、悠書館から「日本の新しい語り」というシリーズを15巻ほど刊行しました。その中から出雲かんべの里と沖縄の「むぬがたいの会」を紹介します。

出雲かんべの里は松江市の施設で、その民話館では安部光江さんをはじめ6名の語り手が交代で、訪れる観光客や近所の小学生たちに昔話を語っています。民話館には囲炉裏があり、そこは聞き手がたった一人でも語る親密な空間です。語り手の多くは島根県出身ですが伝承の語り手は少なく、酒井董美さんが記録し再話した島根各地の民話を土地の言葉で、他県からの観光客にも分かりやすく語ります。

これに対して沖縄の「むぬがたいの会」の語り手たちは、遠藤庄治さんとともに沖縄各地の昔話調査を経験した語り手で、聞き手に沖縄の昔話と言葉を伝えることを目的としています。むぬがたいの会には常設の語りの場はなく、どこにでも出かけて聴衆を前に舞台上で語ることが少なくありません。聞き手は、沖縄の昔話や言葉には深い関心があるのですが、シマクトゥバ（沖縄地域語）だけで語ってしまうとまず理解できません。シマクトゥバの語りの世界をいかに伝え、いかに継承するかが課題です。

出雲かんべの里の語り手も、むぬがたいの語り手も、それぞれ明確な目的をもつ優れた語り手たちです。



民話館で子供たちと語り合う安部光江さん

事務局便り

○寄贈書籍

- ・今井秀和『異世界と転生の江戸 平田篤胤と松浦静山』2019年10月 白澤社
- ・国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告』第217集 2019年9月
- ・日本民俗学会『日本民俗学』第299号 2019年8月
- ・日本民話の会『聴く 語る 創る 第28号 特別号 日本民話の会50年の歩み』2019年11月

○2020年度大会

2020年度の大会は、6月6日（土）・7日（日）の日程で、高千穂大学（東京都杉並区）にて開催いたします。皆さまのご参加をお待ちしております。

○日本口承文芸学会事務局

〒168-8508 東京都杉並区大宮2-19-1 高千穂大学人間科学部 立石展大研究室

Tel: 03-3317-4077（内線3421） Fax: 03-3313-9034

E-mail: info@ko-sho.org

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なされる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会HP（<http://ko-sho.org/>）から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。入会金なし、年会費4000円です。郵便振替口座 00180-4-44834 をご利用下さい。